

名古屋女子大学 和文庫本『土佐日記(解)』翻刻(3)

辻 和良

今回から第二冊目に入るのであるが、前回との間に少々時間を置いてしまったので、繰り返すはあるが、今一度、『土佐日記解』についてと書誌、及び凡例を載せておこうと思う。

土左日記研究においても、他の諸作品の場合と同様に、古注釈類の果たす役割は大きい。しかしながら、土左日記の場合には、例えば源氏物語などの場合とは異なって、それらの注釈書類を簡単に参照できないのが現状と言わざるを得ない。本翻刻がそのような状況にいささかなりとも寄与することができれば幸と思っている。

ここに扱うのは、加藤宇万伎註『土左日記解』である。池田龜鑑は、『古典の批判的処置に関する研究』で宇万伎註の諸本を、a上田秋成の手を経ざるもの、b上田秋成の校正せるもの甲本、c上田秋成の校正せるもの乙本と三分類し、bとcとは上田秋成の手を経たという共通性を持ちながらも、体裁に大きな異なりがあり、cはbをさらに訂正し清書したものとす。体裁上の異なりとして池田が指摘するのは、①両者ともに秋成の増補と思われるものを持つが、甲本では片仮名で記され、乙本では平仮名で記されていること、②甲本では頭注が大体原型のまま保存されているが、乙本では頭注はなく、多くは秋成の自註とともに列記され、その区別が不明瞭に

なっていること、である。本翻刻はこの分類に従うと、「b上田秋成の校正せるもの甲本」に該当する。

書誌は、左の通りである。

○全二冊。写本。袋綴。楮紙

第一冊・五十丁(墨付四十九丁)、第二冊・三十二丁(墨付三十一丁)

○寸法 縦二十七・五糎×横十八・二糎

○表紙 無地薄藍色表紙

○外題 土佐日記(打付書)

○内題 土左日記

○写年次 未詳

○第一冊前表紙見返に、「校本土左日記 弐冊 真淵大人考註 門人藤原宇万伎校正自筆本 奥二名アリ」という貼り紙がある。また、二冊とも一丁裏に「茂吉蔵書」の朱印がある。

凡例

- 一 漢字、仮名の区別は底本のままとした。
- 一 原則として、漢字の異体文字の類は通行の文字に改めた。
- 一 誤写と判断したものについては、該当文字の傍らに正しいと判

断した文字を()に入れて記した。

一 割注は()に入れて記した。

一 本文中には、数箇所朱書き部文がある。それについては、最後に補注の形で掲げた。

一 本文中の句読点は、読解の便宜を考えてすべて私に施したものである。

一 注釈部分は、二字下げが宇万伎註、三字下げが秋成増補と考えられる註、五字下げが頭注である。

一 頭注について。「」でくくったものが秋成増補と考えられる註、何も付いていないものが宇万伎の付したと考えられる註である。

猶、本文の該当箇所後に頭注を入れたために、本文との間に丁数のずれが生じたところがある。その場合には、頭注部分にも丁数を記した。

二十一日うの時はかりにふなてすみなひとくの舟いつこれをみれは春の海に秋の木の葉しもちれるやうにそありける

しも、助辞のうちにもいひ入る詞也。必しも・春しもそ、などいふ、皆同し

おほろけのねかひによりてにやあらん風もふかすよき日いてきてこきゆく

おほろけは、大かたといふ詞也。されは、おほならぬねかひに、とあるへきを、かたくるか。此頃の俗語に、おほろけならぬと云へきを、ならぬの言をはふきていへる。俗語をもて書りと見ゆ。源氏物語にも(1・オ)かくさまにいへることあり。凡、俗語にはいひなれし詞は、理なく、略きてつかふ事多し。今も

(二〇)

しかり。かゝる詞は、みやひことにあらずと知て弁ふへし。或説に、にやは、と見よといへど、しか見るときは、あらんの詞おちぬす。

このあひたにつかはれんとてつきてくるわらはありそれかうたふなうた

なほこそくにかたはみやらるれわかち、は、ありとしおもへはかへらやとうたふそあはれなる

かへらやは、かへらはやとねかふ也

コノ舟哥ニテハカヘラハヤト聞テ、章ハヨロシケレト、上ノ舟哥ニテハ詞ツ、カス。仍テ是ハ、棹哥ノハヤシ言ナルヘク思ユ。若、本語ハ帰ラハヤノ(1・ウ)意ナルヘケレト、必舟哥コトニ、カクハヤスナルヘシ。

みな人は日和のよきを悦ふに、此童は故国の土左の国をおもひてうたふ也。へサルコ、ロニテモアルヘケレト、詞ハフルキウ

タナルヘシ

かくうたふをき、つゝこきくるにくろ鳥といふ鳥いはのうへにあつまりをり

和名抄、鳩(和名、久路止利)黒色水鳥也。

そのいはのもとに波しろくうちよすかちとりのいふやうくろき鳥のもとにしろき波をよするとそいふ此ことはなにとはなけれどもものいふやうにそきこえたる

物云やうなるとは、詞を文につゝりなしていふやう(2・オ)なるそといふ。

人のほとにあはぬはとかむるなり

舟長・舟子ナトノ詞ニテハ、イトメツラシムヘキ作意ナリ。

黒谷白川隣紫野丹波近ナト云聯句ニ似テ。

かくいひつ、ゆくにふなきみなる人波をみて

下に、海の恐しければ、と云によりてなり。

くによりはしめてかいそくむくひせんといふなることをおもふうへに

土左の国を出るより、海賊の追来るといひあへるは、貫之ぬし土左にいませしあひた国の守なれば、海賊ともをきひしく追れし事などのあるを、それにむくひせんとおひ来るなる(2・ウ)へし。或人、因果経の上を引出て云は無益也。

海のまたおそろしければかしらもみなしらけぬな、そちやそちはうみにあるものなりけり

海賊と海とのおそろしきによりて、七八十年の老の一時に我身に来たるこ、ちする事をいふ也。物おちして、年のよりたる事は、魏の韋仲物といひし人、凌雲台の額を書て悉く白髪となりしと云に似つかはしき事也。

海ノ恐シキヨリ、遂二年ノヨルコ、チスルトテ、七八十年ハ海ニアルヘキ者ト云ハ、浦島子カコトナトヲ思ヒテ書ルモノカ。

わかかみの雪どいそへのしら浪といつれまされりおきつしま守かちとりいへ(3・オ)

万葉集に、八百日行浜の真砂も我恋に豈まさらめやおきつ鳥守、此歌をおもひてよみたるなり。沖津鳥守とはよみたれば、鳥守もあらねは、かちとりよ此けちめをいへといふ也。揖取此おとりまさりをいかにそいへと、問かくる也。

二十二日よんへのとまりよりこと、まりをおひゆくサシ行方ノ名モ知ラヌカラ、コト泊トハ云。

はるかに山みゆとし九ツはかりなるをのわらは年よりはをさなくそ

あるこのわらは舟をこくま、に山もゆくとみゆるを見てあやしきことうたをそよめる

あやしき事にて、句を切へし。漢文の例、物語など(3・ウ)に多し。九歳はかりなる童の、少年頃よりはをさなきうまれの者か哥をよみたるはあやしき事、など詞をあやにいへるなり。

こきてゆく舟にてみればあしひきの山さへ行を松はしらすやとそいへるをさなきわらはのことにてはにつかはしけふ海あらけにて

風もつよからねと、浪のたつもみて、あらけにとはいふなるへし。

いそに雪ふり波の花さけるある人のよめる

雪降は雪の如く、また花のことしと、磯ふりの波をみるなり。(4・オ)

なみとのみひとへにきけといろみれば雪と花とにまかひけるかな古今集に、草も木も色かはれともわたつみの波の花にそ秋なかりける、神武紀に難作(成)を浪花ともいひし事あり。

神武紀ノ本文ニハ、到難波之崎会有奔潮太急因以名為浪速国ト云マテ本文ニテ、亦曰浪華今謂難波訛也ト有ハ、注文ニテ古伝ニアラシ。浪速ノ義ハ古意也。浪花ノ義ヤ、後世ノ文ニハアラヌ歟。

二十三日ひてりてくもりぬ

しはし照て、また曇れるなり。

このわたりかいそくのおそりありといへは神ほとけをいのる(4・ウ)

便アシキ泊ニハ、必海賊ラカ便得ルナリ。心ナラヌ泊ノアリサマ見ルカ如ク写出タリ。

二十四きのおなしところなり

二十五かちとりらのきたかせあしといへは舟いたさすかいそくおひくといふ事たえすきこゆ

此二三日ノ晴曇ノミシテ、海ハアラケナルヲ見ルニモ、カ、ル便アシキ泊ニイツマテトカケリ。強テ舟出セハヤトイヘル、械取等カ北風ノアシキ由ヲ云ニソ、風ノコ、ロヲ知ヌニハ黙シテ今日モ暮スナリ。

二十六日まことにやあらんかいそくおふといへは夜半はかり舟を出してこれくる

猶風ハヨカラネト、海賊ノ追慕ヒクルトノミ云ヲ聞ニハ、人々ワリナク械取ニ仰セテ舟ヲ出スナルヘシ。心ノマ、行モ留ルモ安カラヌナルヘシ。

みちにたむけすにこゝろありかちとりしてぬさたいまつらするにぬさのひんしへちれはかちとり(5・オ)のまうしてたいまつることはこのぬさのちるかたにみ舟すみやかにこかしめたるへとまうしてたいにまつる

万葉集に船はつる対馬のわたりわた中にぬさととりむけてはやかへりこね、ともいへり。いつくにも手むけはする也。海神をまつるなるへし。「ぬさのちる」といふは、きさみぬさなるへし。

これをきゝてめのわらはのよめる
わたつみのちふりの神にたむけするぬさのおひかせやますふかなんとそよめる

道返しの神、ちもりの神など有。これは、(5・ウ)道触の神なるへし。行道のほとりの神といふ心也。こゝは海路にかりていへるなり。

チフリノ神ト云神名ハ、モシ彼海路ニイマス神ニ、サル名ノ

(一一)

ヲハスニヤ。道神ノ名ハ、是カレオワスヲ、チフリノ神ト云名聞知ラス。コ、ニ私シテ、道触ノ義以テコトニ設ナシタル名ヲ申スヘクモアラス。或人ハ、隠岐国ニ知夫利ノ崎ト云所に和須乃神ト云カラハスナレハ、其神ヲ奉幣シテ、渡リヲ祈ルトソ申スコトノアルヲ、其神ヲ是ヨリ祈ルニヤト云リ。一説トスヘシ。サレト、此哥ワラハノヨメルトアレハ、サルトホキ国ノカミノミナ、ト、聞シルヘクモアラス。コ、ハ、神名ノ義ヲサシラキテ、知不利ノ神ト申ス神ノ此ワタリニオワスヨシニテ、幣奉ラシムル械取ノ指揮ニマカスルナリト見テ過ヌヘキ歟。

このほどに風よければかちとりいたくほこりて舟にほかけなとよるこふそのをときゝてわらはもおきなも(或本におんなも)いつしかとおもへはにやあらんいたくよるこふ此中にあはちのたうめといふ人のよめる(6・オ)うた

淡路のたうめは、淡路といふ老女にや。おくに淡路のおほいと、あるも同じ人なるへし。

おひかせのふすくるときはゆく舟のほてうちてこそうれしかりけるとそ(一本ふきぬる時)

帆ノヨコ手ニ繩ヲ多クツケテ、右へ左へヒラカントスル繩ヲホテトイヘリ。モノヲヨロコフトキハ、手鼓ウチテアソフサマヲ、舟ノ帆手ヲカセニウチナラスニソヘテヨメリ。

ていけのことにつけていのる

或本に、つけつゝいへるとあり。

大人云、天気をてけ、と云。又、ていけ、と云。て、をひく韻は、えにて、えけといふへきを、い、に通はせていふなり。

二十七日風ふき波あらければ舟いたさすこれかれかしこくなくて
(6・ウ)

かしこくと云詞は、おそる、事なるをいたくなくと云心にもちゐ
たり。

をとこたちの(或本に、心なくさめにかくうたにとりあはせ、と有)
唐うたに日をのそめはみやこと同しなといふなることのさまをき、
てある女よめる

日をたにも天雲ちかく見るものをみやこへと思ふみちのはるけさ

幼童伝といふ書に、晋の明帝五六歳の頃、父の元帝長安の使の
来れるに、日と長安とはいづれか遠きと問たまへは、長安はち
かし。人さらに来る日の遠き事いたるへからすところたへ(7・オ)
給ふ。父帝も是を奇として、其翌又とはせたまふに、目を挙げ
は日を見る。長安の人さりて見るへからす。仍て日はちかし。
長安は遠きに、たり、ところたへたまひしと也。今は此事を詞に
いひ、それをき、しりてよめる。

又ある人のよめる

ふくかせのたえぬかきりしたちくれは波路はいと、はるけかりけり

吹風もかきりなき空より吹来れば、たつ波もかきりなきなり。

日ひとひ風やますつまはしきしてねぬ(7・ウ)

ものうとましくおもふ時は、爪はしきする事かた／＼物にみゆ。
源氏空蟬の巻に、つまはしきをしてうとみたまふ、とあり。

二十八日夜もすから雨もやますけさも

雨かせもやます、夜もすからにて、明しと也。

二十九日舟出して行うらくとてりてこきゆくつめいとなくなかり
にたるをみて

是まては、日毎に雨降、風ふきて、た、てけのこののみおもひ

つ、心もつかさりしに、うらくとてれるに、心ものとやかに
なりて、爪のなかく成たるに心つきし事、さもありぬへし。

(8・オ)

日をかそふればけふは子のひなればきらす

拾芥抄に、丑の日には手の爪、子の日にあしの爪よし、とみゆ。
此頃にかゝる陰陽家の説をもちうる事専也。翌の丑の日を待と
なるへし。

む月なればみやこの子の日の事いひ出て松もかなといへと海なりけ
れはかたしよしある女のかきていたせるうた

おほつかなけふはねの日か蟹ならはうみ松をたにひかましものを

「む月は、うからやからむつひあふなるむつまし月
のこと、もいへり。いせ物語にも、さありぬへし。

或説に、む月はもとつ月也。毛歩約、毛也。む、を
もにかよはせて、む月とはいへりと。是も聞ゆ。○
む月の初子の日も、野に出て小松引、若菜つむ事い
にしへなし。今の京となりてはしまれる事なるへし
とて、今の京家の説に常の子の日は、日を清み、む
月の初子の日は、日を沌りて、ひとよめる也。しは
し日をわくる為にはさもあるへし。初の子の日とい
ふ事を沌る也。きよらなし子の日といは、いつれ
も子の日は無沌にてにこるへし。子の日と、の言
入る時は、日の言伸られとて、日はもとよりすみて
云詞也。○正月七日を子の日とこゝろへて、若菜つ
み松ひく事は、又後の事とみゆ。後撰集に、正月の
初子の日にまつを引、同じ日にわかなつむ事みゆ。」

(8・ウ)

うみにてねの日の歌にてはいか、あらん

伊勢物語に哥の後、記者の詞をそへてあまれりやたらすや、又よしやあしやなといふは、見つめたることなり。こ、もいか、あらんといひて、あしからしと誉めたるなり。

大人云、みつめと云詞聞えず。写しあやまれる也とおほゆ。二十九日といへは、初子の日ならぬこと明らかし。うつほ物語におと子の日といふ詞みゆ。けふもおと子也。此頃は、はつ子のみならず、次の子の日にも松引に、野には出しなるへし。

又ある日とのよめるうた

けふなれとわかかなもつますかすかの、わかきわたるうらになければかくいひつ、こきゆくおもしろき所に舟をよせてこやいつこと、ひければ土佐の泊とそいひける

阿波の国也。鳴門にちかき処也と。(9・オ)

むかしも土左といひける所にすみける女此ふねにましれりけり²⁾

和名抄、土左国土左郡土佐郷みゆ。

そかいひけらし昔しはしありし所の名たくひにそあなるあはれといひてよめるうた

としころをすみしところの名にしおへん³⁾はきよる浪をもあはれとそみる

昔ト云ヨリ、己カ上ヲ物語メキテ書ナセル文ノ巧ナリ。

三十日あめかせふかすかいそくはよるありきせさなるとき、て夜なかはかりに舟を出して阿波のみとをわたるよなかなれはにしひんかしも見えずを(9・ウ)とこ女からく神ほとけをいのりてみとをわたるとらうの時ばかりにぬしまといふところを過て

淡路也。万葉集、淡路のぬしまか崎とよめり。

(一四)

大人云、野島の泊は今も有て、南の土佐阿波を経つ、くる所とそ。西に淡路を見放て、東に紀伊国名草郡を経て、和泉の国に来たる海路也。万葉集の野島の泊は、この記につきてもうたかふへき事あり。事の長ければこ、にいはず

たなかはといふ所をわたる

たな川は、和泉のたな川にや。

大人云、たな川より北をさして、今の堺の津にくるあいたを牛の首の灘とも、瀬戸ともいふは、万葉集に、黒牛方といふわたりなるへし。

いそきていつみのなたといふ所にいたりぬけふ波に似たるものなし神ほとけのめくみかよふれるに似たりけふ舟にのりし日よりかそふれはみそかあまりこ、ぬかになりにけりいまはいつみの国にきぬれはかいそくものならず

和泉は京ちかき国なれば、海賊のおそれも物の(10・オ)かすならずと也。始に、いつみの国までたひらかに願ひたつといひし首尾也。

二月朔日あしたのま雨ふまりうまの時ばかりにやみぬれはいつみのなたといふ所より出てこき行海の上きのふのことくに風波た、す(或本、風波見えず)くろさきの松原をへて行ところの名はくろく松の色は青くいその波は雪のことくかひのいろはすはうにて五いろに今ひと色そたらぬこのあひたにけふははこのうらといふ所よりつなてひきて行

くろ崎、はこの浦、和泉なるへし。和名抄、牽絁(和名、豆奈天)挽船繩也。(10・ウ)

かくゆくあひたにある人のよめる哥

玉くしけはこのうらなみた、ぬ日はうみを鏡と誰か見さらんまた舟君のいはくこの月まで成ぬること、なるまてくるしきにたへすして人もいふこと、て心やりにいへる

心やりは、俗に言心はらしといふほどの事也。万葉に、酒のみてこ、ろをやるに豈しかめやも。おもひやるといふも同言なり。ひくふねのつなてのななき春の日をよそかいかまて我はへにけり

十二月二十一日より、二月朔日まで四十五日也。

大人云、十二月は、小晦日にて有しかは、けふ迄は四十日也。貫之も皆もいかにかそへたまひけん。

(11・オ)

きく人のおもへるやうなそた、ことなるとひそかにいふへしふなきみのからうしてひゐり出して

辛勞してよみ出せる也。

よしとおもへることをえしもこそしひへとて

しひへは、しひめ也。えしひてはいはしと也。

つ、めきてやみぬ

つ、めきては、万葉集に、かた塩を取つ、しろひといへるは、堅塩をくひかきく喰也。源氏物語帯木に、つ、しりうたふといふは、一口つ、くひきるやうにうたふなり。こ、につ、めきてやみぬといふも、つ、といひさしてやみぬる也。平言、つふ

(11・ウ) やくといふは、此転語なり。

此哥ノ評ハ、カリソメナル戯ノミ。猶カ、ル詞廻々ニ見ユルハ、物語、日記ナト書ル中ノ文言ナリ。

にはかに風波たかけれはとまりぬ

二日雨風やます日ひとひ夜すから神ほとけをいのる三日海の上きのふのやうなれは舟いたさすかせのふくことやまぬはきしの波たちか

へるこれにつけてもよめるうた

を、よりにかひなにものはをちつもるなみたの玉をぬかぬなりけりかくてけふくれぬ

或注云、風ヤマテ、日数フル事ヲ歎クナリ。

四日かちとりけふ風雲のけしきけふはたあしといひ(12・オ)て舟いたさすなりぬしかれともひねもす波かせた、すこのかちとりは日もえはからぬかたる也けり

和名抄、乞(加多井)かたるとは、道のかたはらに居て物を乞ふ義也。械師の、日和をえはからぬを怒の、しりて、かたるとはいへる也。

このとまりの浜にはくさくさのうるはしきかひいしなとおほかりか、れはた、むかしの人をのみこひつ、舟なる人のよめる

か、れは、かくあれはを約めていふなり。土左にて身まかりし女兒を、昔の人とはいへり。貝、石などのうるはしきかあるを見るにつけて、おもひ出らん事(12・ウ)さもあるへし。

よする波打もよせん我こふる人わすれかひおもてひろはん

万葉集、いとまあらは拾ひにゆかんすみの江のきしによるてふこひわすれ貝、よせんは、よせねを延ていへる也(昔の人ノナカくニワスレタキトナリ)。

といへれはある人たえすして舟のこ、ろやりによめる

舟ノ心ヤリトハ、舟中ノウサノ心ヤリト聞ユルナリ。コ、ハ、昔人ノ事ヲ思出テ、エ堪スシテ、セメテノ心ヤリマテニ哥ヨメルナレハ、コノコトハノマ、ニテハ、コトワリカナハヌヤウナリ。コトハナト落タルカ、又ウツシアヤマルコトニモアルヘシ。

わすれかひひろひしもせし白玉をこふるをたにもかたみとおもはん

となんいへる (13・オ)

身まかりし事を、海辺なればよせていへり。万葉集に、白玉の
我子古日は、又白玉もてこ沖つしら波なとも有。

をんな子のためには親をさなく成ぬへし玉ならすもありけんをと人
いはんや

おとなしからぬ子をも、おやのひいきめよと人にあさけられん
と也。

玉ナラスモト云ヒ、次ニ死顔ヨカリキト云ニテハ、オトナシ
キコトヲ云ニハアラテ、容ノウルハシキコトヲ云ノミノヤウ
ナリ。

されともしにかほよかりきといふやうもあり

大論といふ書に、臨終之時、色黒者墮地獄、赤白端正者行天上
と有と也。死顔のよきを好とす。

大人云、万葉集の頃の人は、白玉にたくふと思へは、
た、にそれとよみしなり。此頃となりては、白玉そ
とは、親の目のまよひそとことわるよ。かくさかし
らたつか世のうつれる也。さて、玉ならすといひて、
次に死顔はかりはよかりきといふを見れば、容のう
にはしきをいふか。(13・ウ)

なほおなしとて日をおふることをなけてある女のよめる歌
手をひて、さむさもしらぬいつみにそくむともなしに日ころへにけ
る

手をひて、は、手をひたしてなり。和泉は、国の名なれば、く
むとはなしに

寒サハ、冷ノ字ノ義ニテ、泉ノツメタキヲ云ナリ。此泉ハ、
手テ侵スコトモ冷サモ知ラヌト也。国名ヲ泉ナレハト云ワク

ルナリ。

五日けふからくしていつみのなたより小津のとまりをおふ

和泉国日根郡呼喚乎と云郷、和名抄に見えたり。又、神武紀に、
雄の水門とあるも和泉なり。(14・オ)

今ハ、大津ト云所アリ。昔ノ小津ニヤ。又、小津、大津共ニ
モトヨリ在シニヤ

松原めもはるくなりかれこれくるしければよめる

苦シケレト、アリシヲ、写シアヤマルナルヘシ。

ゆけとなほゆきやられぬは妹かうむをつのうらなる岸の松はら

妹かうむ麻といひかけり。万葉に、うみをなす長門の浦、続苧
なす長柄の宮ならよめり。冠辞のみにいひし也。

かくいひつゝくるほとにふねとくこけ日のよきにともよほせはかち
とりふなこともいはいはくみふねよりおほせたふなりあさきたのいて
こぬさきにつなてはや(14・ウ) ひけこの詞哥のやうなるはかちと
りのをのつからのことはなりかちとりはうつたへにわれうたのやう
なることいふともあらず

うつたへは、ひとへに言詞也。されともいまた語釈詳ならず。
万葉集、さか木にも手はふるとふをうつたへに人妻とへはふれ
ぬものかは、又うつたへにまかきのすかたなどあり。いつれも
ひとへにといふ詞也。

大人云、打は、例のそへたる発語也。たへは、断の
字の意。きはめて、たえてなと云時は、事をかたく
きはむる語也。たへと云は、仮名字たかへりと云
へし。此事、論有。余か仮名例に云おけはこ、に略
す。

きく人のあやしうためきてもいひつるかなとて

かきいたせればけにもみそもしあまりなりけりけふ
かせなみた、すいませもめむれゐてあそふ処あり

いましのしは、助辞(或注二乃ノ字いまし下訓也ト云リ。義ハ、
同シテ語意ハ今にし也。乃ノ字当れり)。(15・オ)

みやこのちかつくによるこひのあまりあるわらはのよめる

いのりくるかさまともふをあやなしもかもめさへたに波とみゆらん
風間は、風の絶間也。おもふを、はふきて、もふとなふ。古
しへ多し。あやめさへたにの詞おたやかならず。鷗さへなぞ波
とみゆらんの写あやまれるにや。

大人云、かさ間といふ、との音をひけは、おの音生
る、故に、ともふとつらなるあひたに、おの音こも
れるを以て、おははふきし也。古哥は、うたふの例
をおもふへし。

又云、鷗さへた、に波とみゆらんといふ意にて、此
日来波の恐しかりつるひか目からにやと云なるへし。
といひてゆくあひたにいしつといふところの松はらおもしろくては
まへとほし

和名抄、大鳥郡石津。

又云、石津はいにしへの高師の浜也。今も松原十八
丁有といふ。清き浜辺にて、浜(15・ウ)寺といふ
は古へあかし寺と聞へしか此地に立りけん、松林
の南に今も高石村有。北に石津村有。いづれも高師
の浜なるは、高石と書て、たかしとよみけんを、高
の字を省きて石津とのみ呼ならへりとおほゆるは、
此わたりまてかけて、上世に大伴氏の領せられし地
故に、大伴の高師とも、大伴のみつとも呼ひし也。

高しの浜とも津とも呼しより石津とは呼ならひし事
おほゆ

松原おもしろき所にて、浜辺は今も遠からぬを遠と
云は、いかに。これは、もしとほしろしと有しを写
もらせしにや。浜辺のまさこ路の松原めもはるく
なる所なれば、遠しろしとは(16・オ)広く見はる
かされてさて水た、へて歟、流長きかしらくとみ
ゆるさま也。汀遠しろしと云是也。さて、大なる事
にも広きことにもいへり

またすみよしのわたりをこきゆくある人のよめる(15・ウ)

いま見てそ身をもしりぬるすみの江の松よりさきにわれはへにけり
住の江の松は年経るものと、かねてはおもひつるに、今見れば
我は猶ふりまさりければ、我身のほともおもひしるそと也。或
説に、貫之は元慶八年甲辰日うまれたまへりと、此とし五十二
歳かと云り。

父祖未詳、生誕ノ年何ニヨリテ明ラカニ知ラレケン。

こゝにむかしへひとのは、

昔才人は身まかりし子の年をいふ。むかしへは、いにしへと同
しく、方をへと云也。へへ、読テ、エノ如クトナフ。古今集に、
むかしへや今も恋しき時鳥などよめり。(16・オ)

ひと日かたときもわすれねはよめる

すみのえに舟さしよせてわすれ草しるしありやとつみてゆくへきと
なん

万葉に、萱草と書て、物忘れするよしおほくよめり。さて、後
の世にはおほくよみあはせつ。毛詩の注に護草食之令人忘憂と
あり

大人云、たえて忘れんとは、此うきをしはしわする物ならば摘て試んと也。さて、かくするとも忘る、かきりのあらん。

又、恋乱る、時の便にとて、つみてゆくへきと也。

上手の筆は、言つ、まやかにして聞とりかたき也。

よくあちはふへし。毛詩の注にも、護草食之忘憂、

此詩人託言耳、憂深者雖日食此草未必忘といへり。

こゝの文も此意也。(16・ウ)

うつたへにわすれなんとにはあらてこひしきこゝち

しはしやすめて又もこふるちからにせんとなるへし

ヒトカタニ忘ハテナントニハアラテ、此憂ヲ須臾モワスル、

物ナラハ、摘テ試ントナルヘシ。サテ、カクスレトモ、忘ル、

モ限ノアラン。又、恋乱レタラン時ノ便ニナルヘキハ、コノ

萱草ナルハト云ニテ、上手ノ詞ノ巧メルナレハ、キ、取カタ

シ。

かくいひてなかめつゝくるあひたに(16・ウ)

(続く)

〈補注〉

(1) 「り」を見せ消ち、右傍に「る」。

(2) 「り」を見せ消ち、右傍に「り」。(汚損)

(3) 「な」を見せ消ち、右傍に「な」。(汚損)

(4) 「水」を見せ消ち、右傍に「長」。

(付記) 資料の閲覧、及び翻刻の許可を下さった本学図書館に感謝致します。猶、本稿は、平成八年度名古屋女子大学共通研究費の助成の成果の一部である。